

# 問題冊子

令和6年度 一般選抜(後期)

小論文(和文・英文)

試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答冊子を開いてはならない。

## 注意事項

1. 小論文では、問題冊子および解答冊子の2種類が配付される。
2. 試験開始の指示があるまで、筆記用具を持ってはならない。
3. 試験開始後、解答冊子の表紙および解答冊子の中の3か所、合計4か所の記入欄に受験番号と氏名を記入すること。
4. 試験開始後に問題冊子および解答冊子の印刷不鮮明、ページの落丁等の不備等を確認しなさい。これらがある場合には手を高く挙げて監督者に知らせること。
5. 解答は解答冊子の該当箇所に記入すること。
6. 下書きは解答冊子にある下書き用紙を利用すること。
7. どのページも切り離してはならない。
8. 質問等がある場合には手を高く挙げて監督者に知らせること。
9. 試験終了の指示があったら直ちに筆記用具を机の上に置くこと。
10. 試験終了の指示の後に受験番号、氏名の記入漏れに気づいた場合には、手を高く挙げて監督者の許可を得てから記入すること。許可なく筆記用具を持つと不正行為とみなされる。
11. 試験終了後、解答冊子は回収される。
12. 問題冊子の問題は1～7ページである。



# 小 論 文

1 次の文章は、谷崎潤一郎の『細雪』の冒頭部分である。長編小説の導入として大切な役割を果たしている。この文章を読んで、後の問い(問1)に答えよ。

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入って来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、其方を見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に掴まって、稽古を見てやっているのであろう。悦子は母が外出する時でも雪子さえ家においてくれば大人しく留守番をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃って出かけるとうので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げると云うことでどうやら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一つあるねんで」

「そう、——」

姉の襟頭から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上っている幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見える。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。——」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七十八円、ボーナス入れて二百五十円ぐらいになるねん」

「MB化学工業云うたら、仏蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそう云うことには明るかった。そして案外世間を知らない姉達を、そう云う点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年嵩のような口のきき方をするのである。

(『細雪』 谷崎潤一郎著、新潮文庫より抜粋)

問 1 この文章からわかる範囲で、妙子の家族の構成員について 120 字以内で説明しなさい。

つづきから  
続柄は妙子からみた続柄を用いること。

2 次の文章を読んで、後の問い(問1, 2)に答えよ。

カーブを投げるためには、ボールに回転をかける必要があります。かけた回転の軸によって、球がバッターの手前で水平方向に曲がったり、垂直方向に落ちたりする。落ちるカーブの場合、回転の向きは、ボールの上辺が投球者から離れ、下辺が投球者に近づいていくトップスピンです。

では、どうやって球に回転をかけるのでしょうか。桑田<sup>出題者注1</sup>にそのやり方を問うなら、彼はそのポイントを三点、こう答えるでしょう(図1)。

- ① ボールの向こう側を中指で下向きにこする
- ② ボールの手前側を親指で上向きに跳ね上げる
- ③ 腕の振り方がツーシームやフォーシームとは違う

確かに頭の中で想像してみると、手前と奥に逆向きの力をかければ、トップスピンの方向にボールが回転していくことが分かります。ただ、腕の振り方が他の球種と違うため、習得するのが難しい。これが、桑田自らがカーブを投げるときに思い描いている「感覚」です。実際、そうやってずっと投げてきました。

しかし、計測の結果分かったのは、桑田の体は、こんなふうには動いていない、ということでした。ハイスピードカメラに映っていた桑田の手元は、本人のイメージとはまったく違う動きをしていたのです。

- ① まず、確かにボールの向こう側を下向きにこすってはいるのですが、使っているのは中指ではなく人差し指だったのです。そもそも、仕事をしている指が違う。
- ② そして、親指はリリースの瞬間までボールを支えています。跳ね上げてはいませんでした。跳ね上げるなら親指は外に出ていくはずですが、むしろ手のひらの中に隠そうとするような動きになっています。つまり、仕事の中身が違う。
- ③ さらに、腕の振り方も、ツーシームやフォーシームのときと同じでした。柏野さん<sup>出題者注2</sup>いわく、すべて「昔の水銀体温計を振るような動き」。手をこまねくように上から下にスナップをきかせるのではなく、手のひらの向きが徐々に変化していき最後に外に開くようなスナップが、どんな球種を投げるにも必要でした。桑田は「カーブは仲間外れ」だと思っていたのに、そうではなかった。

つまり、あらゆる点において、桑田の体は本人がイメージする動きとは違う動きをしていたのです。

衝撃的なのは、これがすべて「手」に関して起こっている、ということです。言うまでもな

く、手は私たちにとってもっとも道具的かつ表現的な部位です。あ、財布が落ちそう、と思っただけです。チームが勝って気分があがったら、もう手がバンザイをしている。手はいわば私たちの意識の延長のような部位です。

その手に、感覚と運動のズレが起きている。桑田の手は、意識とは全然違う動きを、おそらく現役時代からずっとしていたと考えられます。第1章で言及したように、ピアニストは鎖骨や顎など手以外の部位への意識がおろそかになりがちだ、というのなら分かります。そうではなく、手が、意識をすり抜けて奔放をやっている。桑田は長い間、いわば手に裏切られ続けていたのです。

ただし、ここでも重要なのは、回転そのものは、本人の思う通りのきれいなトップスピンのがかかっている、ということです。投球フォームがブレていてもコントロールは正確であったように<sup>出題者注3</sup>、カーブにおいても、A。これが桑田の運動スキルの驚異的な特徴なのです。  
ア

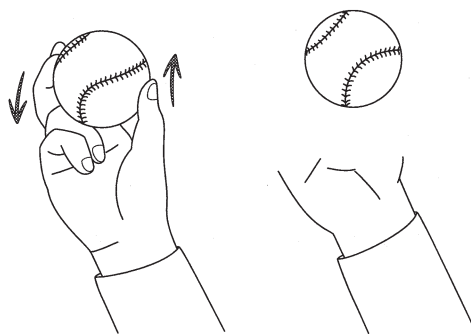


図1\*

(『体はゆく できるを科学する<テクノロジー×身体>』伊藤亜紗著、文藝春秋より一部改変)

出題者注1 桑田真澄 元プロ野球選手(投手)

出題者注2 柏野牧夫 著者の伊藤亜紗氏がこの章で取材した研究者

出題者注3 この設問の文章より前の部分で語られる桑田の投球フォームのブレの話を指す

\* 原文では図は完成しているが、出題のため一部を変更した。

問1 図1は桑田のイメージするカーブの投げ方(左)と実際にやっている手の動き(右)を示している。解答欄の右の絵に指先と矢印を描き込んで、左の絵との違いがわかるように完成させなさい。

問2 文中の空欄Aには、下線部ア「驚異的な特徴」を説明する文章が書かれている。どのような文章が入るか考えて100字以内で書きなさい。

**3** 次の無力感と選択 (helplessness and choice) についての文章を読んで、後の問い(問1～3)に答えよ。

この大問は、著作権の関係で公開しておりません。



この大問は、著作権の関係で公開しておりません。

(Adapted from *The Paradox of Choice — Why More Is Less*, by Barry Schwartz, EccoPress, 2016)

